上桜田アートラボ

バンデッド・ブルー／日本画を語る

TUAD Annual Review Special Talk ——— *About Japanese Painting*

松本 哲男 *Matsumoto Tetsuo*　岡村 桂三郎 *Okamura Keizaburo*　長沢 明 *Nagasawa Akira*　司会 松田 泰典 *Matsuda Yasunori*
番場 三雄 *Banba Mitsuo*　末永 敏明 *Suenaga Toshiaki*　谷 善徳 *Tani Yoshinori*

バンデッド・ブルー in 鶴岡アートフォーラム

松田 —— 今日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。この紀要は12号から一新し、冒頭の企画として、『上桜田アートラボ』と題し座談形式の記事を入れております。今回は日本画コースの先生方にお集まりいただき、近況やこれからの日本画の将来などを話していただこうと思っております。
早速ですが、先日、本学教授陣の作品展『バンデッド・ブルー』が鶴岡アートフォーラムで開催されましたが、そこからお話をお伺いしたいと思います。バンデッドブルーは28名の先生方の作品を一堂に会して、本学の教授陣が日頃どのようなテーマで制作をしているのか、どんなデザインを構想しているのかというところを皆さんに見ていただき、芸工大の潜在力を知っていただこうという趣旨の展覧会でした。アートフォーラムは小沢学長の設計ということで、そういう意味でも箱自体が作品というイメージであり、その中で我々も展示したという点でも、非常に意義のある企画だったなと考えております。松本先生は、何かお気づきの点があればお願いします。

松本 —— 僕が驚いたのは、芸工大はとにかくバラエティーのある個性の集団だなというところです。いい展覧会だったと思いました。日本画だったら一つの同じような作品が集まりますが、それがああいう中に入って、自分の位置を探し出せるすごくいい展覧会でした。28人もが集まったっていう点で僕は本当に良かったような気がします。

長沢 —— 僕は正式に去年の10月に本学へ就任して、他の先生方の名前と顔はよく見てるんですけれども、作品と結びつかなかったんですね。それが先生方の顔と作品が一致して見えたような気がして面白かったです。一つ感想を言えば、「しきり」のことですが、ちょっと狭く見えた気がしました。だから、物理的な問題だとは思いますが、もう少し開放的な見せ方ができたら良かったかなと思いました。日本画は日本画の中で固まっているような感じがしたので他のジャンルともっと入り交じったほうが良かったかなと思いましたね。

松本 —— 僕は、28名は多すぎるとも思いましたね。4、5名であのくらいの規模が出来れば良かったなとも。しかし、逆にアートフォーラムを使ってこれからずっと続けられるような気がしましたね。

岡村 —— 展開としては、きっと面白いと思います。誰かと誰か、これとこれを合わせるとどういうものが生まれるのか、そういうことがきっとあると思います。当然かもしれませんが、それぞれの作家としての部分で、力を抜かずに、本気で作品を出しているところに見応えがあったと思います。実際やるとしたら、もう少し人数を減らして、対立を打ち出していければもっと面白いかもしれないですね。

松田 —— 今後の課題として、検討していかなければなりませんね。
あれを鶴岡でやるということは、いろいろな点で発展が期待できますね。地方でいわゆるビエンナーレみたいな面白いことをやるということは…。ああいう企画は東京では出来ないから。広報も東京や関西まで広げて積極的にやれば、あれだけいい展覧会だから名物になりますね。

長沢 —— 鶴岡まで見に行った学生もいましたが、あとから「事前に知っていれば見に行ったのに」という声もありました。学生にあまり伝わっていなかったのが残念です。

松本 —— あれは見せたかったね。勉強になるもんね。

松田 —— 積極的に送迎バスなどを出してもっと見てもらいたかったですね。

末永 —— 4月に就任したばかりで一番の新参者ですが、他の学科の先生方のことを知らないし、まして作品も知らないし、あそこに自分も出させてもらって、自分が来たところがこういう学校だったんだという青写真が一気に見えました。学生たちも、実際に先生方の作品

『BANDED BLUE（バンデッド・ブルー）』
—東北芸術工科大学の28作家—
2005年9月16日～10月2日
鶴岡アートフォーラム（鶴岡市）

も知らない、まして他の学科の先生方のことも知らないですから、もっと見せるべきだったと思います。またこれから美術を勉強しようという人たちがあの展覧会を見る機会があったら、美術がどういう方向に動こうとしているのか、この大学がどういう方向に向かおうとしているのかという所を見せることができたのではないかと思いました。

谷 —— ひとつひとつの展示を学生に紹介出来たら良かったと感じています。同じ芸工大にあって、絵画とデザインは普段は別々なことが多いですが、私も新鮮だったんですけど、今回の展示は相乗効果ですごくマッチしていたと思います。また、小沢学長がデザインした建物とうまく融合しながら立体の作品が建物に合っていたなと思いました。それを自分の作品も新鮮に見れたし、よく見る先生の作品も違った感じで見てとれました。

岡村 —— 鶴岡という場所が古い城下町で、まわりを見渡すと致道博物館やいくつかの歴史ある建物もあり、酒田を含めて一つの日本海側の庄内文化の集中した地域に、芸工大の先生方の作品展が初めて開催されるということが、山形にも庄内にもどんどん伝わり、それがより強い文化交流になってくれる可能性もあるし、ますます盛んになっていくのではないかなと思いました。

松本 —— 東京で以前に美術科だけで企画展をやったのですが、やっぱり同じジャンルが集まると、同じような平面の並べ方になってしまうんだけど、今言ったように立体や映像などいろいろなものが入ったりするとものすごく騒ぎだすんだよね、会場が。あの経験は、ビエンナーレの中に行ってみて同じようなことを感じましたね。ああいう経験は、平面の人も立体の人も一緒にやってみると面白い。山形で、今後そういう事ができないかと思います。卒制もいわゆる日本画、洋画と分けずに融合して展示していくと面白いんじゃないかな。

岡村 —— 教育の話になってしまうかもしれないんですが、僕らが教えている核になっているものはやっぱり自分の作品なんですよね。自分の作品を見せることによって、学生たちに学ばせている部分っていうのがあって、自分たちがどういう作品を作っているかっていうことが、学生たちの一番刺激になる部分だし。ただそういう発表活動とか作品を学生たちに生で見せる、生な授業っていうんですか、一番言葉でいくら教えても、教えきらない部分を作品が語ってくれる部分があるんで、ああいうものを身近に学生たちに見せる機会があると、だいぶ授業で足りない部分が補えるんじゃないかなと思います。

松本 —— 実際に我々日本画も、言葉でやっていてもダメだもんね。実際どうだ！っていう風な、それを見て考えつかないのか！っていうような、そんな荒っぽい教え方ですが…。

岡村 —— 何を言わなくても、作品を先生が作りその背中を見て育ってくるというのは、僕もそうでしたし、とくに大したことを言わないけれども先生の生き方を見てて、何となく後ろで学んできたっていうのがあって、そういうことをここでも大事にしていきたいなと思いますね。

松田 —— そういう意味では、今回の展覧会は大成功だったと言えますね。

松本 —— 出しているほうもわくわくしていました。自分の絵がこういう人たちと一緒に並ぶっていうこととか、みんなお互いそうだったと思いますが、展覧会自体が動いてるっていう、とてもいい展覧会でした。

自由な発想を築く

松田 —— 今のお話だと、今後もバンデッド・ブルーの第二弾、第三弾ということで続けたほうがいいんではないか。山形で開催するという方法も含めて、考えたらいかがでしょうか。例えば山形美術館を貸し切ってやるとか、そういう方法もあるかもしれませんね。

松本 —— 山形美術館の3階はいつも使われていないんですって。館長が、もっと芸工大生があそこにたくさん来てくれて、自由に使えるように工夫したいと話していました。大々的に催して使うべきですよ。美術館大学構想の中にもそういうものを入れていくと面白いんじゃないかと思いますね。

末永 —— いろんな学科・コースと一緒に展覧会をするということですが、日本画の場合卒業して日本画家としてやっていくと、一緒に展覧会をするメンバーが同じ日本画家だけのグループの中でということになります。実際これからの将来的なことを考えると、すでに現在の展覧会っていうのはいろいろな形で作品を作る人間がたくさんいて、大学で今回やったのは、日本画家のコーナー、洋画家のコーナーとちょっとパーテションが分かれていてせっかく一緒なのにな、という印象でした。たとえば、自然な展覧会のあり方の考え方としては、自然をモチーフにしてるような思考の作家が、立体だろうが平面だろうが映像だろうが、そういう一つのくくりの場所であったり、なんかすごく希望的な科学的なことをやっているような作品は、またコンセプトごとに展覧会を考えていくというやり方のほうが、そういうスタートは大学で一緒にいるからこそ出来る可能性がありますよね。

松本 —— 大学だけだよね、そういう時期って言うのは。

末永 —— 国際美術展とかになってくると、

松本 哲男 *Matsumoto Tetsuo*

●美術科日本画コース教授。画題の中心は風景画で、世界三大ホール等、描かれた大作の数々は、高く評価される。1969年院展初入選。以後、大観賞等各賞を受賞。1983年同人推挙。この間、1975年栃木県文化奨励賞、1984年芸術選奨文部大臣新人賞を受ける。1989年文部大臣賞受賞、1993年内閣総理大臣賞受賞。1994年パリ・エトワール三越で個展。

岡村 桂三郎 *Okamura Keizaburo*

●美術科日本画コース教授。1958年、東京都に生まれる。東京芸術大学大学院修了。五島記念文化財団研修員として渡米。主なグループ展では「絵画の現在」展（新潟県立万代島美術館／2003）などがある。山種美術館大賞展優秀賞（1987）、創画会賞（1985、1988）、五島記念文化賞美術新人賞（1993）タカシマヤ美術賞（2003年）など。2004年、琳派RINPA展（東京都近代美術館）に出品。

キュレーターが「今回のテーマは何」とかっていうので、色んなメディアの作家を集めたりということはありますが、その点はまだまだ日本画は遅れているような気がしますね。

松本 —— とにかく大学だっていうのは、自由がある。自由な発想が持てるような学生が育ってくれれば。

末永 —— 大学だからスタートさせるってことが可能ではないか。

岡村 —— うちの学校の美術科は、他の美大と比べて精神的な垣根が低いんですね。他の大学と比べれば、楽に垣根を取っ払った表現の可能性が生まれる学校なんじゃないかなと思いますよ。それがいい特徴だと思うんです。そういったものをもっと出していってもいいんじゃないかなという気がしますね。

松本 —— 大学院の実験工房みたいな、そういうことをやっているのがいいよね。ああいうのを増やして立体の連中も一緒にやればいいですね。

岡村 —— もっと自由にやれる時間があればいいですね。

松田 —— グルーピングして、その中で内向きにやるよりは、色んな人と交流しながらやるとか？

岡村 —— ある意味ではそういうものも必要なんじゃないかと思うんですよ。それ全部なくしちゃったらまたつまんなくなるし、ただそうじゃない部分がこっちにあるんで、ここもあればこっちもあるというかたちを作れる。

松田 —— 行ったり来たりできる学校だと思うんですね。

岡村 —— できる。

松田 —— それは本当に教育の話で、具体的に言えるんじゃないかと思うんです。日本画では新しい先生が二名加わって、大分雰囲気が変わってきたなと思いますがその辺はいかがですか。何か新しくなったことは？

松本 —— 困ってますね。（笑）たとえば、今まではカチッと固まってしまったものがあったんですが、生き返らせてくれました。物の考え方一つとっても均一静動する世界を日本画だって教える傾向があったんですが、人間だー！って叫ぶような先生たちが入ってきて、今やっと良い状況になってきてる。大学らしいなって。もちろん徹底した教育とか、ドローイングや自然に対する力も必要ですが、その他に自由にもっと楽しくワクワク出来る、って言うような部分がないと大学じゃないような気がしますね。その点を二人が持ってきてくれたんですね。それにものすごく感謝しています。学生を見ていると今とてもいいコースになっていると思います。

新しい風をうけて

松田 —— 先陣を切ったのは岡村先生ですが、どうですか。

岡村 —— さらにいろんな学生がいるので、いま一クラス約30人として、4学年で百十数人いて、やっぱり、そこには色んな学生がいるわけで、しっかり描きたい人もいれば、自由に描きたい人もいて、学生によって伸びる方向とか質って違うと思うんですよ。例えば、ここにタンポポが咲いていて、ここに百合が咲いていて、こっちにはチューリップが咲いていたら、育ち方って違うんですよね。それに対して合わせるタイプがいろいろといえば、いろいろと方策を与えることができる。みんな同じようにタンポポを育てているのに、百合と同じ育て方をしていたらタンポポは育たなくなるだろうし、そういういろんな学生に対応出来るっていう点では、多様な表現ができる学生が生まれていって、その中で成長をして競い合ったり、仲良くなったり。いろんな可能性はどんどんふくらんでお互いにとってもいいと思いますね。

松田 —— ところで新人の先生方はどういったご感想ですか。

松田 泰典 *Matsuda Yasunori*

●文化財保存修復研究センター長、美術史・文化財保存修復学科教授。1955年小樽市生まれ。東京農工大学農学部卒業。東京藝術大学大学院保存科学専攻修了。民間研究機関で真珠の材質・保存の研究を進めたのち1993年から本学教員。その間、1989～90年には正倉院宝物の材質調査を委嘱された。文化財の保存環境、とくに木材からの揮発性有機化合物をテーマとして研究を進めるかたわら、地域文化財の保存・活用を地域とともに考える活動をおこなっている。

番場 三雄 *Banba Mitsuo*

●美術科日本画コース助教授。1953年、新潟県に生まれる。1979年に「北春の朝」で院展初入選。1981年、日本美術院々友推挙、院展受賞作品では「峠」（1998）、「祈り」（1999）、「寧児」（2002）、「寧日」（2002）、「横臥」（2003）など。2003年、第37回現代美術選抜展（文化庁）出品。日本美術院特待。師・今野忠一先生。

長沢 明 *Nagasawa Akira*

●美術科日本画コース助教授。平面だけではなく、立体やインスタレーションも試みる。1994年、柏市文化フォーラム関口文化基金によりニューヨーク研修、五島記念文化財団研修員として渡欧（ロンドン）TMON賞、五等記念文化美術新人賞受賞、2004年文化庁買い上げなど。

バンデッド・ブルー／日本画を語る

TUAD Annual Review Special Talk

——— About Japanese Painting

長沢 —— 一番最初に来て感じたことは、教員と学生の距離感がすごくいいということです。私は東京芸術大学だったんですが、そこでは先生がすごく高い所にいて、とてもこちらから話しかけたりというような感じではなくて、また多摩美術大学なんかは逆にフレンドリーすぎるという甘さなんかも聞いていたので、この芸工大っていうのは、先生もいつもいろいろ話を聞いているし、また先生たちも学生をいつも自分の部屋に呼んでいろいろなことを教えられるような、そういう信頼関係っていうものがすごく上手くいっていると思います。僕たちは月1、2回鍋パーティをするんですが、それがまた一役買っていて、普段授業で話しづらいことでも鍋を囲んでというムードの中では話しやすいということもあり、そういうのもすごくいいと思っています。自分でいうのもなんですが、僕らが来て学生にとっても選択肢がものすごく増えたんじゃないかと思います。今まではこれやっていいんですか？これやっちゃいけないんですか？という学生が多かったような気がしたんですけど、最近はこういうものをどうやって使ったらいいんですか？というふうにかなり能動的になってきたような感じがします。

末永 —— 長沢先生と、ここに来た時の感想は同じなんですけど、久しぶりに日本の学生と触れてびっくりしたのは、えっ、これやっていいんですか？えっ、これも日本画なんですか？という言葉を聞いたんですね。僕がいた所はドイツだったんですが、芸術・美術っていうのはなんでもありの所で、やっちゃいけないことなんかなくて。この子たちはまだまだ自由だってことを知らないんだな、と思いましたね。そして、これも日本画なんですかって言われた時に、逆にあなたが思っている日本画ってなんなのって聞いたら、やはり答えられないんですよ。日本画ってなんだ、って断定して箇条書きで説明出来る人はいない世界ですから、昔からタブーとされている質問で、その説明はまだ続いていくだろうし、また自分たちで作っていかなくちゃいけないものだと思うんですね。日本画とは自分にとってこういうものだというものを、いろいろなタイプの先輩たちである先生方の中から模索しながら、自分で開発していかせられるようなエネルギーが与えられたら、と思いますけど。

番場 —— 一番思っているのは、いろいろな作品の切り口ですね。見方や角度、作品の創作の仕方、自分の持ち味が異なる教員が非常勤講師を含めて大勢いて一人一人の学生に対応しているわけですが、学生の選択肢、また制作、作品の作り具合というところで、一人一人の個性が自由に出せるかどうかといった意味では自分の本気を出していかないと逆に学生が育っていかないと思います。

松田 —— 人間なんだ、作り手の魂みたいなものがないと作品にならない。

番場 —— そうですね。

松田 —— 具体的に教授陣の中でも醸成されてきているという感じが最近するんですが。

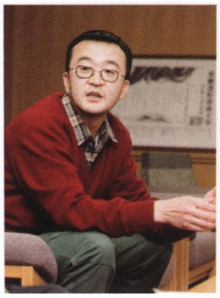
松本 —— この学校では前からずっと写生をものすごく重視するんですね。写生が第一歩の始まりですよね。写生を基本的にとってることが他の大学にはない強さだと思います。番場先生と谷先生の取り組みを見ていると分かる。あれを受けついでプラス自由でワクワク感がある。

長沢 —— 僕も思います。いくら自由だからといって、何でもかんでもやればいいってものではなくて、しっかりデッサンや写生で培ったものがあるから、色んなものが試せるわけで、それがなければ、本当に何もないということなんですね。

松田 —— 基礎がしっかりできているということですね。

松本 —— 写生すると集中力がつくよね。

長沢 —— なるほど、この大学の一番の武器になっていると思います。写生することによって集中



末永 敏明 *Suenaga Toshiaki*

●美術科日本画コース助教授。1964年、神奈川県に生まれる。東京芸術大学大学院修了。文化庁在外研修員として渡独。デュッセルドルフクンストアカデミーにてマイスターシューラー取得。主なグループ展では「両洋の眼展」「Roter Reiter」などがある。2001年エンゲルベルト・ケンペル国際コンクール1等賞受賞、1989年上野の森絵画大賞展大賞受賞など多数。「両洋の眼－現代の絵画展」（日本橋三越他）、「Roter Reiter展」（ミュンヘンドイツ）等に出品。

谷 善徳 *Tani Yoshinori*

●美術科日本画コース専任講師。近年は水など形のないものを主題に内面の自己表現を模索。1990年国際瀧冨士美術賞。1993年春の院展初入選。1994年、院展初入選。以降毎年出品。1998, 2005年春の院展奨励賞。1999, 2004年院展奨励賞。2000年現代美術選抜展（文化庁）出品。他に、河北美術展一力賞、富嶽ビエンナーレ展、東京日本画新鋭選抜展、旅人会展、個展など。

力を培う。他の大学にはない強味だと思います。

松本 ―― いわゆる山形の地の利を完璧に活かしている。それにこういう人たちが来たから。

末永 ―― リアルにというか、自然描写主義の絵を描いているわけではないんですが、写生をするんですね。写生する時は、手を動かしながら、物を見つめて、考えて、そういう時間を持てるんですよね。それは、だまってシャッターを切るとか、そういうのでは絶対得られないようなものがインプットされますし、また時間をかけてその場所で見つめるとか感じるということが自分の中でどんどん物を考える時間にもなって、その時間だけでも考えられるし、またその時間が過ぎてからでも考えられる。そこからどういう表現をするかということを大前提として、物を見る、感じる、心を養うという意味では、本当にいい授業だと思いますね。

松本 ―― 自然と対話してね

松田 ―― それは都会の大学ではなかなかできないというところですよね。

松本 ―― 芸工大でしか出来ない。

末永 ―― 今の流れとしては、スタイル選考型の流暢が日本美術全体にあるような気がするんですけれども。

岡村 ―― 逆に今の情報があまりにも多すぎるから、逆に山形にいたほうが集中していいかもしれない。

谷 ―― うちの学生って、実感を伴った作品を作っているというような気がしますね。新しい先生も加わって、今までのやり方を非常に徹底してやれるようになったと思います。軌道修正してもらえる、で言ったことを否定もしてもらえる、安心してこちらの思っていることを伝えられる、そういう体制が出来ているような気がしますね。

松本 ―― それができる要素がある。

松田 ―― 京都にグランヴィアホテルっていう駅ビルのホテルがありますよね。そこの二階通路のところに、京都のいくつかの芸術系大学の日本画作品がずらっと飾ってあるんですよ。僕はあそこに行くたびに通るようにしているんですが、いつも思うのは魂が聴こえてこない。京都と比較をしてしまいますが、芸工大の学生の作品の方がずっといい、はっきり言って本当にいい。

岡村 ―― 今日も学生の作品を見てて、たぶん一番いいだろうな、東京芸大よりいいんじゃないかな、と思いました。

松田 ―― しぶといんですよね。

松本 ―― しぶといなぁ。

一同 ―― うん…

松田 ―― そう思いますね。胸を張ってこれはすごいだろう、っていえるような作品を学生が作っているんですよ。

松本 ―― あとはどう展開するかが課題ですね。我々が刺激を与えて…。でもあくまでも、我々が作家じゃないとだめですからね。ただ先生で口先だけで言っていてはだめだね。でも、ここには口先だけの先生が一人もいないですね。全員が作家で、現役でトップを走っている連中ばかりですからね。それが学生にとって、すごい逆の刺激になってますよね。なんとかかんとか言いながらもトップクラスのレベルを維持しているし、それがいいわけで、我々が学ばなくなったらおしまいですよね。いい大学にしようじゃない。いい作家の先生がたくさん集まってくればいい。その人間の作品を、背中を見せながらね。それが基本だと思うね、僕は。

東北芸術工科大学 創立14年を迎えて

松田 ―― 大学が出来て14年たちますが、日本画の分野ではかなりきちっとした地盤ができつつありますか。

岡村 ―― あと何十年かして、卒業生がちゃんと育ってきたらある程度ですが、まだまだ途中だとは思います。

松田 ―― 卒業生も30歳を越え始めましたよね

松本 ―― あと10年後、40歳を越えてそこで実力がみえてくる。

松田 ―― 先生方も現役でがんばっていただかなければ。

松本 ―― 僕の絵なんてほとんど油絵みたいだと言われてすごいコンプレックスだったわけ。日本画を描いていない日本画家だとかいわれて。ところがパリの連中が何を言ったかというと、日本人のエスプリがある、と言ったんです。要するに心情とかそういうものが、これは日本人じゃないと表せないとか。そのとき、あ-やっぱり、そういうのがあるんだな、そういう独特のものが、日本の民族が持つ情感とか、どこにも負けないものがあると感じましたね。

末永 ―― 考えるものではなく、どうしようもなく出でしまうDNAがどこかにあるんでしょうね。松本先生はそれを意識されていますか。どこが俺の日本人なんだってところを。

松本 ―― それはやっぱり最初の時の写生ですよ。写生の時にものすごく大切に自分を描いていってそこにあった残像や、心の中にあるものを絵にしていたわけですよ。

松田 ―― たぶん日本人が持っている美意識なんでしょうね。伝統的に持っているDNAですね。同じものを見てても、外国の人が見ていいなと思うのと我々が見ていいなと思うものは、大分違うんじゃないかなと感じますね。

松本 ―― だからこの大学の学生が美意識をしっかりもてばいいんじゃないかな。

松田 ―― その基本が写生だと。

松本 ―― そしてもっと、自分を開放していくことなんじゃないかな。

松田 ―― 今日はありがとうございました。